

雌肉捕食！サメ

【第1話】 若い雌肉食べ放題

コンクリートに置かれた巨大ホホジロザメの死骸。その腹が切り裂かれた。ドシャーッと海水とともに、食べたものが飛び出してくる。その内容は、やはり……というものだった。

この体長6メートルを超えるホホジロザメは、事故が起こったとある海域で駆除された個体。ここには他にも三体のホホジロザメの死骸が置かれており、どれも大きい。腹を裂くと、先ほどと同じく海水とともに食べたものが飛び出してきた。

バラバラに喰いちぎられ呑み込まれた女子高生たちの身体がサメの胃の中には入っていた。

その事故は、とある女子校の修学旅行の最中に起きた。一学年 100 名近くの高校 3 年生。夏だったこともあり、ビキニ姿の彼女たちは二十隻のボートに分乗し、美しい海の景色を堪能する予定であった。途中までは何事もなく楽しい時間が過ぎていった。

楽しそうにはしゃぐ彼女たちは、様々なスタイルだったが、皆魅力的なプロポーションだった。バストもヒップも豊満で、それでいてウェストはキュッとしまった体型の少女たちも多い。ボートは波に揺られ、大きめのバストやヒップをもプルンプルンと揺らしていた。

このまま楽しい時間が続くはずだったが……

陸からかなり離れた海域にて、少女の一人が海上で何かを見つける。

「……あれ、サメ？……サメじゃない？」

海面を移動する三角形の何か。サメの背びれである。同じボートに乗っていた他の少女たちもそれを見つけ、にわかに騒ぎ出す。

他のボートに乗っていた少女たちも気づく。が、彼女たちは別方向を指差していた。サメは1匹だけではなかった。

いつの間にかボート群は、サメの群れに囲まれていた。サメの背びれを見つけた少女たちは騒ぎ立てるものの、さす

がに全長9メートルのボートに乗っている限りは大丈夫だろうとガイドは判断した。

各ボートにはガイド兼操縦者の若い女性が乗っていた。海に慣れていた彼女たちもこれだけの数のサメを見るのは初めてだったが、この時点ではまだ楽観視していた。

しかし……

一際大きなサメがボートのすぐ近くを横切る。ボートに迫る大きさのサメである。全長6メートルほどはあろうかと推測される。ここに来て、さすがにヤバいと彼女たちも気づく。

が、その大型サイズのサメたちはボートに襲いかかってきた。大きな口を開け、鋭い無数の歯を見せ、ボートへ喰らいつこうとする。ボートのカーブした形状に、なかなか噛

みつけずにいるが、その禍々しい肉食の口に恐怖した彼女たちは恐怖にパニックになる。

サメは何匹もいる。そのうちの1匹が、ボートの側面に突進！

その衝撃にボートは大きく揺れる。サメたちは彼女たちを獲物だと判断したようである。

このボートは硬くて食べられないが、その上に乗っている生き物たちは、柔らかくて美味しいご馳走なのだと気づいたかのようであった。そして、相手が反撃してこないと分かると、より積極的に突進してくるようになった。

そして、ついに一隻のボートが転覆させられてしまう。
海に投げ出されるビキニ姿のJKたちとガイドの若い女性。
パニックはさらに大きくなり、他のボートの少女たちも叫

びまくる。

ご馳走が海に落ちたことに気づいたサメたちは、すぐに獲物へと迫り、J Kの下半身へと喰らいついた！

水中へと引き摺り込まれた少女は、尻からすっぽりとサメの口の中へ下半身を咥えられている体勢。息もできない獲物の身体を、思い切り喰らいつきながら左右へ激しく振り回す。まもなく獲物の身体が喰いちぎられる。

下半身は呑み込まれ、息絶えた少女の上半身が水中にただよう。すぐに別のサメがそれを美味そうに呑みこんだ。海面からは真っ赤に染まった様子しか見えないが、何が起きているかは分かる。少女たちは泣き叫ぶ。

血の匂いに興奮したサメたちは、海に落ちたご馳走たちへと集まってきた。そして、我先にと柔らかい肉に喰らいつ

く。興奮ぎみに喰いちぎり、美味そうに呑みこんでいく。
貪るように少女たちの肉を裂き骨を砕き、美味そうに呑み
こんでいく。

ガイドの女性は少女たちよりボリュームのある乳房と尻肉
があった。サメたちはそのボリュームミーな柔らかい肉も喰
いちぎり、美味そうに呑みこんでいった。

そうこうしているうちに、他のボートも1つ転覆させら
れた。若い雌のエサが海へと投げ出される。すぐにサメが
迫ってくる。6メートル級のホホジロザメ。迫り来る背び
れに気づきながらも、海の中では逃げることもできず獲物
は泣き叫ぶしかなかった。

そして少女の下半身へと喰らいつき、硬く鋭い無数の歯が
柔らかい肉へと突き刺さり、激しく左右に振るとそれは切
り裂かれ、喰いちぎられ、美味そうに呑み込まれていった。

残った上半身は激しく振られた勢いで水着は外れ、J Kの大きな生の乳房が水に揉まれていた。すぐに別のサメが喰らいつい、美味そうに丸呑みしていった。この大きさのホジロザメであれば、半分にちぎられたサイズの人間の女は丸呑みにできるようである。

もはやサメたちにとってここは、食べ放題のバイキングのようであった。まだボートの上にかろうじて残っている少女たちも、自分たちがいつご馳走として捕食者の胃の中に収まるか分からない恐怖に泣き叫ぶしかなかった。